東京日新聞
千八拾號
千八拾九号
三十振袖四十島田夫を云る
色さる一奇話ハ三千年も若
し彼の浦島に因ある
神奈川縣下小倉村ノ
素麺屋源兵衛が養
母なるものハ今年
八十七あまと
元来浮氣
の性にして
今ハ
二上り三下り湯上り粧ひ白粉の
窓ま座さてあきとても弥助と言
る職人といつもち露と寐さとて
アレ寐ぬとて風説が主人の耳
ノ入りてらば世間の口を留んと
弥助へ暇を遣ひ丈
やきい意煩ひ明暮弥
助の噂のミ大聲
揚て言ハ物ハ
狐憑の碍碍
と家内一統
ての御祈祷
この〜この窺ひ
さまどもるしも
なき已あ氏身
體次第ニ衰へて
やう骸骨の如く
九
人形町 具足屋
一蕙齋芳幾